

昭和四十七年五月二十六日 講演

「ゲーテの人と文学」

ゲーテ研究者 東京大学名誉教授 立教大学教授 手塚富雄先生

ただ今ご紹介下さった上平さん（理事）からは、「手塚先生」などと言われましたが、私は上平さんとは「僕、君」と呼ぶ間柄で、つまり旧制高等学校時代からの同期生でありまして、先生などといわれる間柄ではないのであります。というようなわけで、上平君からの話がありましたものですから、参上したわけであります。実はご縁はこれで二度目にして、ちょうど五年前にこの和敬塾へ伺ったことがあります。非常に良い環境で、私はその印象を今も強く持つておりますが、今日また伺って、こういう処で日夜過して勉強しておられる方は、そういうことを思わないかも知れませんが、恵まれたことだと思っっている次第であります。

いま、ご紹介にありましたように、私がドイツ文学をやっておりますので、ゲーテの話を、思いつくままにしようというわけでございますが、自分の経験で申しますと、若い頃、まあ昔の旧制高校時代は、ゲーテという人を嫌いであつたのが真実であります。どこが嫌いであつ

たかと申しますと、落ち着き払っている、常に愚痴をいわない、困ったという弱音をはかない、よいことばかり言っているという感じがしたので、そういうことを思った次第でございますが、そのうち、大学にはいりましてから、ゲーテという人は偉い人である、落ち着き払ったような態度はしておりますが、そうなるまでには大変な苦勞をしているんだということが非常に解って参りまして、特にゲーテの中年の作で『タッソー』という戯曲がありますが、タッソーというのは、ゲーテ自身のことをタッソーというルネッサンス時代の詩人の名を借りて書いたといつてよいかと思ひますが、実に神経の細かい、他人との関係において絶えず気を遣つて、自分を無駄に苦しめるといふようなことを書いたものであります、そういうことをどういふふうにして乗り越えて行つたかということがテーマであります。そういうようなことで、始めからよい気な人ではなかつたということでありまして、それ以後多い少ないの区別はあ

りますけれども、今の自分との関係を申し上げます、やはりゲーテを読まなかつたならば、自分の考え方、生き方等が大分異なつていたのではないかと思ふ節がございます。その辺のことを段々お話しして行くつもりであります。

日本文化とゲーテとの関係を申しますと、こういうことがいえるのではないかと思ひます。ゲーテは文学者・詩人でありまして、文学好きの人に読まれるのは無論でありますけれども、しかし日本の社会への受け入れられ方は、決して日本の文学愛好者だけがゲーテを読んでいるというのではございませんで、いろいろ文学以外の実務に携わっている人が、案外このゲーテという人に親しんでるのであります。その証拠を申しあげますと、今は亡くなりましたけれども、お医者さんで東京の駒込辺に住んでいた人がありましたが、これは表面上は、あまり感服しないと思ふのであります、ゲーテ宗なるものを標榜しまして、それで信徒を集める。信徒というのもおかしいのであります、

まあゲーテ好きの人を集めて、一緒に話していく会を作った人もあります。今、東京ゲーテ協会というのが渋谷の道玄坂の上にあります。これは粉川さんという人がやっております。この粉川さんは東京ゲーテ協会を作って、ゲーテに関するあらゆる文献を集めようとしております。いまその蔵書は大変なものであります。その粉川さんという人は全くの実業家でありまして、味噌を作る機械を造る人で、それでお金を儲けたらしいのであります。それでゲーテに傾倒しまして、この人の生涯は、ゲーテに打ち込むことよって、生甲斐を感じているといつてもよいかと思います。これは二つほどの例でありますけれども、いろいろ他にも挙げる事ができると思います。

こういうふう一般の生活感情、生活意識に訴えていることは、他の外国の文学者と比べまして、一つの特徴であるといえるのではないかとと思うのであります。シェークスピアという人を考えてみますと、やはり劇の好きな人、文学の好きな人が関心を持っているが、生活一般に影響を及ぼすということとは、やや遠いのではないか。そこがゲーテと日本のわれわれとの関係が特殊なのではないかと思えます。

これはゲーテという人の考え方、在り方から来ているのだと思います。随分多方面の人であります。文学者、詩人、政治家であり、それか

ら自然科学というものを素人以上に熱心にやりましたので、これは全く真似のできないことで、自然科学者といわれてもよろしいのであります。いろいろな植物とか鉱物とか解剖学とか地質学とか、多方面に亘って本気で取り組んでおります。そういう広い人ですから、一言でゲーテをどういふようにつかんだらよいかという事はみんなも困りまして、いろいろな表現で言われております。例えば、フランスの詩人であり批評家であるバレリーという人は、普遍的な人だと言っております。普遍的というのは、広い人だというような意味だと思えます。間違いはありませんがそれはゲーテの一つの面をつかんだのだと思います。それからイギリスの詩人でT・S・エリオットという人がありますが、エリオットはこの人を智者、つまり賢人と申しております。智慧のある人、智者である、しかも詩人であるから詩人的智者であると言っております。この解釈は、実は私などはバレリーの普遍的という言葉よりは、より多くの同感を感じるのであります。誠にゲーテという人は詩人であることが、一つの智者ということに繋がっておるものと思えます。しかしこのような抽象論をしてもはじまりませんから、実際にゲーテがどんなことを言っているかということとを、一つ二つご紹介してみましよう。

まあいろいろエピソードと申しますか、語録

の多い人で、誠に面白い優れた言葉がありまして、ゲーテの箴言集、語録というものは、日本でも翻訳で大分出ております。そのうち一つに、「不愉快を感じることも、われわれは自分の役に立てなければいけない。それも生の一部分、いや大部分であるから」。こういうことを言っております。この考え方は、いかにもゲーテらしい考え方、結果はプラスの方向へ持って行っております。しかし、マイナスをプラスに転換するところがありまして、これを聞かされますと、われわれも行き届かないなりに、多少はこれを見習おうと思えます。最近の大学のようには、私も大学の教師の一人ですが、愉快なことばかりではございません。実はこうしてお話しながらも、私はあまり愉快な気持ちではないのでございまして、実は上平君との繋がりがなかったら、多分来なかっただろうと思っております。これも我慢している。これも生の一部分だから、いや大部分だから、これもゲーテの有り難さを感じるのであります。

もう一つご紹介いたしまししよう。「相手の優れた長所に対しては、愛をもつて対するより他には対抗の手段はない」。われわれは世界にあつて、自分はたった一人であります。他の人というのは、無数の数千万人あります。すべて自分は相手の良いところばかり見て、敵わないと小さくなるばかりであります。そこで、小さ

くなれば徒に嫉妬するか、自分を憐なむとかいうことになる。その時に考えを変えてみて、相手の長所を認め、それを愛する気持を持って行く。そうすれば、たしかにそれを認めるということが、既に自分を大きくしていることであり、大きくすることによって、何時の間にか自分は気がつかないけれども育つておることになります。

一つ二つのことをみましても、やはりゲーテはただの人ではない。これが理屈張っているのではなくて、自分の生活の体験から出ている一つの智慧、これが彼の作品には非常に無数にちりばめられております。

ゲーテといえば、まず『若きウェルテルの悩み』ということを言いますけれども、これもいい訳で読めば、或る程度よいものですねけれどもしかし何といつても二十代の若い時に、それも二週間程度で書きなぐったようなものでありまして、晩年のものに比べますと、とてもその深さというものは、比べものにはなりません。常識的に世界文学で何を読むべきかという表を見ますと、必ずゲーテの『若きウェルテルの悩み』と書いてあるが、これは常識であって、常識というのは、ただ聞いておけばよいのであって、あとは自分で判断して読んで行くよりほかはありません。また前に戻りますが、私は若い時にウェルテルの翻訳を読んで、こんなもの

一体何処がよいんだ、実につまらない本だ、と思った。今は若々しいところがよい、と思っておりますけれども、ゲーテの作品の中では、そう高いものだということではできないと思いません。文学史における影響ということについては、また別の問題で、それはその人の作の良し悪しと、その時代に対して与えた影響ということは別なものでありますから、別の文学史の問題でありまして、別な観点から今言っておるわけがあります。

ところで、ゲーテという人は歴史的にどういう人であるかといえますと、何といつても近代の人であります。十八世紀の中頃に生まれて、八十三歳で十九世紀の三〇年代に亡くなった、近代の人であります。もう少し大きい目で見ますと、近代というのは、ルネッサンス以後の生活感情が近代といつてよいのでありますから、ゲーテのことを或る批評家はルネッサンス人だということをおっしゃいます。ルネッサンス人というのは、どういうことであるかといえますと、それは人間の自主的精神を大事に考えるということでありまして、つまり中世期のように、神の掟であり、神の命令であるから、これに従えばよいという態度ではなしに、自分自身の中から、良いと思つたことを良いとし、悪いと思つたことを悪いとする。自主的な判断、自主的な行為を尊ぶという、一口にいえば、そういう

ことだと思つて。他にもいろいろな角度で見られると思つてますが、こういう面が強くルネッサンスの精神といつてよいと思つてます。その他に合理精神等いろいろありますけれども、今はこのことだけ申しておきます。

そうすると、ゲーテという人は、ルネッサンス以後の近代的人間の自覚において生きて行こうと、強く打ち出した人だということがいえると思つてあります。若い時に、『プロメートイス』という詩を書いたことがありますが、プロメートイスというのは、天上のジュピター即ちゼウスの大事にしている火を盗んで、そして人間に与えた。そして人間の文明が盛んになつたんですが、ジュピターからひどい刑罪を受けて、コーカサスの山の上に鎖で繋がれて、そして生きてきたままで肝を鷲についばまれたという苦しみを受けたという、それを題材にしたゲーテの詩であります。プロメートイスは、神の主権者であるゼウスに反抗して、我は生きて喜ぶのも悲しむのも、すべて人間と共にする、人間と共に生きるんだということ、神々に向かつて「お前たちほどあわれな存在はあるか。お前たちは人間の少しの供え物とか香の煙とかで、やつと生きていてではないか、俺は自分で生きるんだ」ということを書いた若い時の詩であります。いま持つてくるのを忘れましてから、そのままということでは控えますが、そんな

なことを言っている。これは、先ほど言いまして強い人間の自主的精神で生きるんだ、ということがいえると思います。

ところが、人間のこういう精神はむろん立派な仕事であり、大きいプラスを持つことでありますけれども、また非常な危険と申しますか、困難ということが伴っているということを見落とすことができないと思います。実はゲーテ以後、現在に到るまでの人間精神は、こういう人間の自主精神を強く貫いたあまりに、人間が途方に暮れているといったようなところがあります。例えば、ご承知のニーチェのような人でありますが、ニーチェは、この人間の自主的精神を貫いた人であります。結局、どこまでも高く伸びて行く人間は自分であって、これを超人といい、或はツアラトウストラと申して、それを喩えます。そうしますと、結局自分の責任の根柢というものは自分にありますからして、自分が責任を無視してしまえば、どうにでもなるのであります。つまり、どこまでも高く伸びて、神になることもできますけれども、しかし自分の他に責任はないのでありますから、自分がその責任を放棄してしまいますと、人間は獣になることができます。これは理屈でいうばかりではなしに、文明の姿がそれを表わしております。人間が人間の能力を極度に貫き、そして自分の能力を延ばすことだけを考えて

おれば、どういう危険な状態にあるかといえ、それは抽象的よりも現代の歴史が教えてくれるわけであります。これが先ほど申しました人間主義といえますか、或はヒューマニズムというものの裏の危険であり、困難なところでもあります。

こういうことに対して、ゲーテはどういう態度をとったかということが問題になるわけでありますが、中年の詩でありますけれども、『神性』という詩、「ダス・ゲットリツへ 神々のような神々しきもの」といったような意味がありますが、普通『神性』と訳されておりますが、これも人間主義というものでありますけれども、この神性はプロメーティスと比べますと、やはり成長の跡が見えると思えます。それはこういうことを言っております。「われわれは、この空に在る神様（これは未知のもの、神があるかないかは解らないから）、空に在る未知なるものを崇めよ」と言っております。「その未知なるものは、われわれが小さい範囲で、小さいスケールでしていることを、その神が大きいスケールでしているかの如く神を崇めよ」。ですから、結局神の原型となれ、そして人間というものは情け深く、善良であれというようなことを言っております。といいますのは、人間が人間として善良であることを自分に努めますならば、それは神が在るとかないかという抽象

論になるよりは、神が在るということを自分の在り方において信ずることができる。つまり、神の有無ということを考えようよりも、自分が小さいスケールにおいてもそれに近いようなものになりうるように努めよ、ということをや、中年のゲーテは自分に対してそういうことを言っております。

神という言葉を使っておりますから、或は宗教的と思われるかも知れませんが、これも彼の人間主義の別な表われなであります。もとは自分の人間的な別な表われなであります。実はもとは人間の自分の在り方をまつすぐにすれば、神が在るかのごとく思うことができます。しかし、それを自分を捨ててしまえば、やはりそういうことを思うことができない。ここにも危険は非常に伏在しております。しかし、その危険を危うく自分の一つの意志によって繋ぎ止めようとする気持がございます。そうすると彼の考えることは、結局、自分というものを尊重して、そして自分に対して尊敬を払い畏敬する。畏敬という言葉を使っておりますが、これはドイツ語では、エルフルヒトという。やや重みのある言葉でありますから、訳するのにも「畏」という字と「敬」、おそれ敬う、畏敬の念を持つことで、ゲーテは範囲の広い人ですから、決してこの宗教的なことで否定的のようなことは決して申しません。しかし彼の本音は

やはり人間主義にあるのだと思います。

そして、畏敬という言葉によって、これは彼の老年時代の言葉ですが、天を畏敬し、地を畏敬する。天というのはわれわれがすべて現状に満足しない、より良くあろうとする時、上を見ますから、そういう上を目指させるといふ、そういう天を畏敬することは当然でありましょう。地を畏敬する、地は自分の生まれたところ、生まれたものを畏敬する。ドイツ文学では、よく人間は大地から生まれたということを常にいうんですが、われわれは大地から生まれた覚えはないと感ぜますが、よく考えてみれば、実は人間というものはすべて大地から生まれているのであつて、この地を畏敬するのも、当然なことだと思ひます。皆さんも故郷に居る時は、そう思われないかも知れませんが、離れば、そのことがより多く痛感されるのではないかと思ひます。しかし、この天への畏敬、地への畏敬もその根本とすべき第一の畏敬とすべきことがあることをゲーテは言つておるのであります。それは自分自身に対する畏敬ということでありませぬ。自分に対する畏敬を持てと。そうすると自分というものを大事にしなければなりませんから、それが駄目ならば、自分というものがどうしても駄目ならば、天や地を畏敬するどころではありませぬ。結局は、根本は自分にあるわけでありませぬ。これは自分にあるの

で、簡単なようでありませぬが、実に難しいのであります。皆さんはどうか知りませぬが、私などは自分を顧みてみますと、到らない所、不満な所、汚れている所、そんな所ばかりですから、これはちよつと畏敬出来ない感じがします。そう感じるものですから、どうも他のものは畏敬できなくなる。あやふやな気持になることがあるのであります。しかしもし自分を畏敬できたらよいなあ、という気持は若干はあると思うのであります。まあ表現は違ひますけれども、結局彼の考え方は近代的な人間を中心にして、そこから出発する考えといつてよいかと思ひるのであります。

ただ、ゲーテの広い処は、近代に近いニーチエ等と比べまして、ニーチエは全く観念の世界で、観念の中で人間絶対主義を貫きますから、いわば真空の中に出たようなもので、真空の中で俺は偉い、偉いと威張つていよう感じがあります。ゲーテの優れているのは、人間を元としますけれども、人間というものが孤立してあるものではなくて、やはり自然の中の存在であるということ深くつかんでおる。自然科学者でもありますし、また実際に生きた自然との繋がりを持つております。ここがゲーテの人間主義が、真空の中の虚空で人間を神だとするよな増長慢、自己肥大症にならなかつた大きな原因だと思ひます。人間を自然との繋がりにお

いて、従つて彼は人間というものを、自然の在り方において見るといふ点を決して忘れておりませぬ。それで常に自然の在り方でございますと、何といつてもわれわれは生きていますのでありますから、強く生きたいとか、或は生き生きとしたい、成長したい、育ちたいという気持がありますから、この育つ、成長するということが彼の思想の生き方の眼目であります。何に当たつても育つということ、先ほどの不愉快なことも役に立てなければならぬということも同じところから出ている、育ちたいという意識だと思ひます。そうですから非常に生き生きとした、それが現代の思想家と非常に違つるところであります。やはりゲーテのほうがより堅実といへば堅実ということがいえるのであります。現代に近い思想家は、観念の中で苦勞しますけれども、この自然との繋がりを忘れているところがあります。

ゲーテの話に戻りますけれども、この自然と繋がつて生き生きと生きるという、この生きるという時にどうすればよいかという活動、行動をしなくちゃなりません。『ファウスト』の中にも試験管の中で生まれた小人のホモンクルスというのがありますが、それがこんなことを言ひます。「私は存在するのです。存在する以上、私は活動しなければなりません」。小人の癖に、小賢しくもそういうことを言ひます。こ

れなどもゲーテの一つの考え方でございます。ファウスト全体が行為、活動というものを主眼としたと、通常いわれていますけれども、ゲーテという人は人生における活動、つまり働くということを重ねてみます。それから人間が生き生きとなる場合は、どういう場合にそうなるかといえますと、これは、われわれが自分を考えてみても若干解るところなんですけれども、異性に関心をもつて、異性と仲良くないとやはり生き生きとできません。もともと嫌いな人なら駄目なんですけれども、好きな異性とつき合つて、仲よくなれば、生き生きとしてきます。そういうわけで、この人は非常に異性、つまり女性と何遍もつき合った人でありまして、ゲーテの評判が悪いのは、主としてこういうところにあります。いわば浮気な人間ではないかと、一種のドンファンみたいな男ではないかという。私の細君などは、私がゲーテを口にしますと、よい顔をしません。ゲーテをその面であつかんでいるのが主な理由であります。これもこの点がゲーテは愛という言葉をしきりに言いますが、彼の愛という言葉は主として生命というのと同じような感じで受け取れます。ドイツ語で申しますと、愛がリーベですね。リーベは喫茶店の看板にも出ているくらいですから、多分「承知だろう」と思います。それから生命というのは、レーベンと言いますね。

どちらもLではじまる。リーベ、レーベンで、音が比較的似かよつております。殊にはじめの音が同じです。ドイツ語というのは、はじめの音が一致する頭韻法、頭韻、アリタレーション、これが元来好きな民族でしたもので、ゲーテはこのリーベとレーベンということをや殆ど同じような意味に使っているふうが多うございませ。簡単にいえば、彼は恋愛というものを一種の手がかりにして育つていったというふうな感じがいたします。そこがエゴイズムではないかといわれる理由が十分有り得るわけでございます。これは皆さんご自身の判断批評をゲーテにお下しになるのがよいかと思います。まあこういうふうになると、彼の人間主義は禁欲主義ではございません。或る一部分をよしとし、或る一部分を悪しとして、それを押さえて、良き部分だけを育てようというのではなくて、人間の中における殆どすべての欲望感、或は意欲をほつたらかして、その上で飽和・中庸をとろうという態度であるということがいえます。これはひとつの生き方で、いろいろな生き方があるわけでございます。例えば、中世の宗教の聖者が苦行して、自分の心の中のよしまな思いをすべて退治しようという行をしようという。そうしますと、絵などによくありますように、あらゆる悪魔がその聖者を囲んで群がって来る。それはありうることだと思えます。

そういうふうになるとあらゆる自分の思いというものが、非常に大きな課題となつて、戦つてくるものだと思います。一種の善悪裁断主義で、そして悪を切り捨て、善のみに就こうと、これはもちろん立派な態度でありますけれども、苦しいものです。これは、世の中の仮にキリスト教的態度と申しておきますけれども、これに対してギリシャの思想というのは、そうではありません。ギリシャの思想というのは、人間におけるあらゆる思想を取り入れて、その上で中庸をとる。中をとる、或は調和を尊ぶという態度であります。ですから、人間のすべての面が生かされた上で、自分をもつて行くわけがあります。このギリシャ思想とキリスト教思想を比べてみますと、ゲーテは明らかにギリシャの思想の系統を受け継ぐ人です。このギリシャの系統が、ルネッサンス以後のヒューマニズムとして生きてくるわけでありませけれども、中庸の人であります。これは生温いといえ、これほど生温いことはないであります。自分の一部を切り捨てるということをしなくて、全部の存在を認めた上で、その中庸調和を心掛けるということですから。ただ人間の現実の生き方というものは、このほうが智者の生き方かも知れません。これも軽々な判断はする必要がございません。これは人間世界の歴史的な大問題だと思います。どちらかというと、人間

世界の相対する思想であります。ですから皆さんもトライ・アンド・フォールですからいろいろやってみるのもよいと思います。一カ月か二カ月、中世風にやってみる。その次はギリシヤ風にやってみる。それで自分の判断を実験的にして行くということ。これは先ほども言いましたように、仮に信仰、善悪、神と悪魔と申しましたけれども、他の言葉でいくらでも置き換えられることであります。理想といっても、政治思想といってもよいのです。何でもよい、それを明、光百パーセントに対するものを、闇百パーセント、暗闇というふうに見てやってみる。そしてそのことを裁断でやってみるという態度は一つの人間の生き方であります。その生き方と相対する思想が歴史の中に濃く流れているのであります。ゲーテのほうは、その生温いようでありませけれども、人間のあらゆるものを認めて、そしてその中庸調で行こうというのが彼の考え方の本筋であります。従いまして、先ほど申しました異性に関心が多く、愛とということを彼流にいうということも、人間のそういう面を生かすことに転化しようとしているのであります。従って彼は決して聖者ではありません。人を褒めるのにもいろいろ褒め方がありまして、彼はなかなか人の褒め方が上手でございまして、人を悪くいう場合でも、最初から悪くいわない、まず褒めます。褒めて

おいて、ひよつと本音をつけ加えます。これはよく気のつく人は気がつくので大丈夫なんです。気がつかない人は、ただ褒められておると思っているだけなのであります。この辺は私らは随分無意識なんですけれども、大部ゲーテ流になっていると思います。大概褒めることからいたします。そのうち本音は必ずいうんです。今日もそのうちそういうことをするかも知れませんし、またしないかも知れませんが、そういうわけでゲーテは聖者ではございませぬ。道徳万能主義者でもありません。随分口の悪い人です。

『ファウスト』の中で、ファウストという主人公が居り、その相棒にメフィストフェレスという悪魔が出てきますね。よくいわれることですが、この悪魔は、実はゲーテの分身なんだと、ゲーテ自身にそういう要素があるんだといわれております。これは非常に当たっていると思います。メフィストが非常に痛快な悪口をいうのであります。なかなか面白うございませぬ。一つ二つ例を挙げてみましょうか。

第二部のほうですが、メフィストが或る悪魔が集まるお祭りに出かけて、ギリシヤの悪魔に出会って、メフィストはキリスト教の悪魔です。から少しまごついてしまう。そのうち魔女にモーションをかけてみる。そしてさんさん魔女にからかわれて馬鹿をみるというくだりがあり

ます。女性たちは、これは妖女と書いてある怪しい女たち、魔女です。色好みの爺さんを、からかってやろうというわけで、逃げるようなふりをしたり、立ち止まったりしております。メフィストがこんなことを言います。これは女性の悪口です。「いまましい、また騷られたか、馬鹿馬鹿しい。アダムこのかた、男はこの頃馬鹿にされどおしだ」と。「年は取るが、利口にはならん。これまでも随分と頓馬な真似をしてきたが、まだ足りないのか」と。これは女性にからかわれて愚痴です。「一体女というものは役に立たんということには誰でも知っている。腰は紐でくくって細く見せ、顔には白粉を塗らたくる。何所をつかまえてもまっとうな手応えはなく、中はぶよぶよに腐っている。それはこつちに知れている、細大洩れなく見えている。それがこつちに解つていても、彼奴らが笛を吹くと、ついまた踊りはじめなのだ」と、まあこんなことを言う。悪口を言つてもうまいですね。まあこういう要素があります。それから非常にフェミニストであつて、女性というものを高く見ているのは、後で時間があつたら申します。今のお話は、ゲーテは人間のあらゆる要素をおし殺したのではなくて、あらゆる要素の存在を認めて、中庸調をはかった人だということ。いった心算であります。

結局、先ほどから申しましたように、人間に

畏敬をもつ大きい意味で、人間信頼をするという事に帰着すると思います。人間信頼の念を彼は持ち続けたのだということになると思います。それで第二次戦争でドイツがすっかり破壊されました、前途の希望が真暗闇であった時に、或る町でゲーテの像に（ゲーテの像は方々にあります）、無名の人によって花環が捧げてあったという挿話がありますけれども、これなどは誰が供えたかわからないところがわれわれの胸にくるのであって、国の前途が解らないところに、ゲーテの人間信頼の気持で生きて行くならば、将来があるかも分からないという気持を、その人は持ったのだと思います。また自分で持つことによってみんながその気持を持つことを願ったものだと思います。

ファウストの話が出ましたので、ファウストを続けたいと思います。ファウストはゲーテが大学生の頃（二十いくつかの時）から書き始めようと思ひ、そして死んだのが八十三歳ですが、死ぬ前年に書き終えた。そうすると六十年かかっている作品であります。尤も六十年間のすべてをこの作品にかけきったではありませんけれども、中断はされましたけれども、六十年間念頭に置いておいた作品でございまして、非常に優れたものであります。優れたものといえますと、このファウストを読みますと、何か哲学の本を読むような恐れ入って謹んで読まな

ければならないというお考えをお持ちの方があつたようですが、そんなことは決してありません。実に面白いものであります。嘘だと思つたら読んでいただきたいと思ひます。私はあまり自分の広告屋ではないのでありますけれども、私の訳したファウストに若干の意味があると思ひます、ファウストの面白いところを汲み取ることが、これまでよりは出来たのではないかと思ひます。今のメフィストの言葉でもなかなか面白うございましょう。ああいった調子の中に、深いところが隠されておるのであります。

それはそれとして、ファウストの根本とするところは何かであるかということを考えてみますと、私はこう思ひます。それは先ほどゲーテは行為、働きを重んずる人ですから、そのことを主張したんだという解釈もございします。それもむろんでございします、私が思うには、人間が人間として生きるということは、これは意味のあることなのか、ないことなのかという問いに對して、彼は精一杯の答を出そうとしたのだということがいえます。そうすると、人間信頼はもうすでに彼は分かっているのだから、答はもうすでに出ているのではないかといえますけれども、そこがゲーテの真面目なところでありまして、彼は根本は人間信頼の面から出るのでありますけれども、決して安易に、イージーにそうだそうだと自分にいい聞かせてい

るのではなくて、さまさまの現実においてそれに反對の答を、人間はこのように浅ましいものであるか、このように頼りないものであるかということをしつかり見詰めて、そのうえでしかも人生の意味があるかないか、ということに精一杯の彼としての答を出したのである。ファウスト全体として私らが感心しますことは、彼の人間信頼ということをはじめから立てているのでなくて、あらゆるマイナスの面を、これでもか、これでもかと自分に突きつけて、そのうえで結局彼は肯定の答を出しております。それは意義があるといつておりますけれども、決してラフにしておるのではないということをお認めることができると思ひます。

ファウストの中にはそのことをいろいろ書かれておりますけれども、他にさっきの箴言的なことで、そういうマイナスの面をいつている言葉を随所に見受けることができます。一つご紹介しますと、「結局、人間の世界は永久に良くなならないだろう。何時になつても党派の争いだ」と。これは彼の機嫌の悪い時に言ったのであります。永久に繰り返して、何時になつても真実にこういうふうと思ひざるを得ない時があります。永久に繰り返して、何時になつても党派争ひです。全くそのとおりです。中世期は法王党、つまり宗教派と皇帝党、つまり現実派が争ひ戦つた。そういう党派の分かれ方が、現



代には現代の党派の分かれ方がありません。党派に決めてしまえば、党派の主張、その立場が優先する、こういうふうには愚痴も言いたくなりません。ゲーテの、そういう気持がファウストには殆ど余すところなく出ていると私は思います。

皆さんもお読みになった方があると思いますが、最初の頃の作に『天上の序曲』というのがありますが、神が出て来て、メフィストが神と賭けをすると、神様が言いますには「人間は努力する限り迷うものだから、決して彼はお前のものにはならない」と、神がメフィストに予言するところがあります。神様が保証しているのだから、ファウストは救われるだろうと、われわれは安心してしまふところがあります。そんなふうに見えますと、はじめから答が決つてしまつてゐるように思います。だからゲーテは天上の序曲は後になつて題をつけたんです。けれども、あれをつけたということは、全体の額縁をファウスト個人のことではなしに、神様を前にしての人間であるという大きな額縁をつけたという長所はございますけれども、読者をちよつと安心させるという点では若干マイナスがないでもないと思います。ゲーテ自身は決して予定しておりません。それから今、神と申しましたが、これはファウストを読みますのに、もし失礼があつたらお詫びしますけれども、神を信ずるといふ気持ちをもつて読みましたら、

非常に楽に読むことができますが、神ということとはゲーテにおきましては、一つの舞台装置といひますと言ひ過ぎかも知れませんが、そういうものを出して、一種の対立の形を示すとか、一種の技巧、これも言い過ぎですが、そういうふうなものだということを考えますと、なかなか難しくなります。結局、人間の中にある神、人間の中にある悪魔です。悪魔メフィストも神も、恐らくそうだと思います。人間の中にある神、そうだとみますと、人間世界のことだと、なかなかファウストは読み難くなります。とにかくわれわれはファウスト全体をみますのに、ファウストが救われる。救われるということとは、人生は意味があることと同じことだと私は思います。そういうことを予定しないで、どんなにそれを反対の事柄を貫いて、彼のプラスの答を出しているかということを考えて読むと、面白いかと思つてあります。

ファウストの中の二つか二つの例を出してみますと、ファウストの第二部に、先ほど申しましたメフィストがギリシャの悪魔の祭りに出かけるところがありますが、そこには、ギリシャのいろんなお化け、良いお化けもあり、悪いお化けもあります。それが沢山出て来て、いろいろなことをする。これはいわば人間のカリカチュアをそこに現わしたようなものですね。そのお化けに擬えて人間のカリカチュアを

表わしたものだと思ひます。河上徹太郎君、この方は上平君と同じようにわれわれの同級生で文芸批評家として優れた人ですけれども、ファウストを読んで、随分面白かつた、全体としてはゲーテが勝手に漫画を描くような気持で書いたんだ、と批評しておりましたが、さすがに専門の文芸の批評家だけに、ファウストの全体をゲーテが勝手に、ああのここのと漫画を描いて見せたのだといううまいつかみ方だと感心したことがあります。これはファウスト全体についていったことではありますが、この第二部にあるギリシャの悪魔の祭り、ワルプルギスの夜、古典的なワルプルギスの夜という場面ですが、これなどは、特に漫画、カリカチュアの意味合いが多いのです。例えば、青鷲が美しい羽根飾りをつけておる。それを他の小人が、あの羽根をとつて、自分の兜の飾りにしようと、その青鷲をとつて青鷲を全滅させる。そうすると、青鷲の親戚の黒鶴が憤慨して復讐を誓つて、全軍が小人たちに襲いかかる。或は地震の神が、地の底から頭を持ち上げてきて、傲慢をします。「俺がこの大地を揺すぶらなかつたら、世界はこんなに美しくならなかつた。こんなに美しいのも、俺が揺すぶつたお陰だ」と言ひます。そして大地を揺すぶりますと、方々に割れ目ができます。割れ目ができますと、金銀の寶石がきらめきます。それを取るため小人たちがかけつ

けます。そしてどんどん繁殖して行きます。そうすると、また財宝を取ろうとする者が現われてきます。そうすると、また小人たちに使われている蟻のようなものが、奴隷としておつて、これが絶えず反乱の時機を窺つておつて、そして主人が景気が悪くなれば、逃げ出そうとして窺つております。まあ、さつきの繰り返し繰り返しの人間の争いの姿であります。私はシュヴァイツァーの平和論を思い出しますのであります。シュヴァイツァーの平和論というのは、もちろん平和を主眼とした論文ですが、その根源を深く考えてみると、例えば領土問題にしても、これが誰の領土だということとは非常に難しい問題だと。或る段階においては、或る国の領土であつて、今続いておつても、それより以前には、また他の民族が居つて、それが追われたということもあり得ると。そういうことを考えてみると、実に難しいということをおつておるのであります。

地震によつて大地に割れ目ができると、すぐに小人がかけつけて、其所に居つく。小人が来るというのは、小人の生命観として尤もなことでありませう。しかし、そこにまたすぐこれが争いのもとになるといふ。そうしますと、人生というものは、一体どうしたらよいだろうと、考えざるを得ないような気持になります。これを端的に表わしているのが、ギリシャの哲学者のタレスといふのと、アナクサゴラスといふ哲学者のお化けですが、タレスの方は、世界の元は水で出来ている。アナクサゴラスの方は、世界の元は火だ、火がすべての根元だと言ひ争いをするんですね。この争いが非常にうまく出来ていふと私は思ふのです。どちらも思想家ですから、哲学者の風格と品格を持ちながら、遠慮のない論争をする。思想的な論争をする。言葉は激しいけれども、お互いの思想家としての一つの相手を認めるという態度は失つておりません。この時に、水成論、火成論のどちらに、分がありそうかということをおつてみますと、どちらかといふと、現実的には、火成論の方に分がありそうだと思はれる。何故かといひますと、例えば地震の神が大地を揺すぶると、急に一晚で小山ができる。そして小人が居つくといふ。一晚でこういう変化があるではないか、だから世界の根元は火なんだと言ひます。タレスは、これに對してどう答えるかといひますと、それはそういうことである。しかし、そういうことがあつた後ではどうかね、つまり一晚とか一夜とかいふことは、それは小さい尺度で見れば、そういうことであつて、自然の変化といふのは、そういう小さい目盛りで捉はれておりはしない。それが過ぎてしまへば、結局、この世界といふものは水の力によつて大きく、ゆるやかに変化して行くんだと。これがタレスの言ひ分

あります。これを科学上の論争としますと、火と水の對立といふのは、あまりに簡單過ぎますから、何しろ物質の根元、大きいエネルギーを砕いて探らうといふ時代ですから、いくら砕いても砕き切れないんですが、そういう時代ですから、火と水といふのはあまりに小さい論争だといふふうにおつて考えられますけれども、当時はそういう論争があつたさうです。

しかしそれはそれとして、これを仮に政治論に翻譯してみますと、どういふことになるかといひますと、火成論といふのは急激な変化に伴ひまして、それを良しとする立場であります。それからそれに対して水成論のタレスの立場は、大きい全体の中での変化といふものを尊ぶ考えでありまして、大きい對立であります。この辺のことを皆さんゆっくりお読みになると、面白いところがあります。こういうふうには、火と水をゲーテは對立させまして、これをどういふふうにおつて解決させるかといふ難しい問題であります。結局のところは、どんなに偉い学者でも、詩人でも、解決などといふことは出来るものではない。結局は、願ひをいふだけではありません。これはこの場合（悪魔の祭り）の終りなんですけれども、そこで試験管の中で作られたホモンクルスといふ小人ですが、私は存在するのだから活動しなければならぬと言つた試験管の中の小人なんです、実は生命を

得たくて仕様がな。何とかして本当の肉体を持った存在になりたくてしようがない。そして智恵のある人が海辺へ連れて行きますと、生きた潮風が吹いてくるから、ホモンクルスの生命感情が、ずっと漲ってきます。その時にちょうど夜の女神の行列があります、夜の女神の行列がいろいろな火を灯しておりまして、その火が美しく海の色に照り映えているのを見ると、海の中にホモンクルスの感情が燃える火となつて輝きゆらめいて、明るく水面に映え、まわり一面に溶けて流れる火の海になります。

晩年のファウストは皇帝からこの海岸の土地を貰つて埋立事業をすることによつて、自分の生甲斐を感じるわけでありますが、実はその時ファウストは盲になつていたのであります。なぜ盲になつてゐるかと思し、権力者になつたファウストが権力を持つてみても、殆ど百パーセント満足ができない。向こうの丘にどうしても立退かないという老人夫婦の家がある。それを自分の家にすれば、ずっと良い見晴しをもつて自分の埋め立てた土地を見渡すことができようと思つと、その土地を取りたくて仕様がな。そして直接その老夫婦を殺せと言つたわけではありませんが、あの土地を取り上げよと言つたものですから、メフィストはすぐに其所へ行つて、結局、老人夫婦を殺してしまふ。結局、その土地を取つたことになりま。

権力の在り方というものがまざまざと出ております。ゲーテがファウストの最後のところでそう書いてゐる。それで百歳の彼は憂鬱に捉われて、ファウストはその憂鬱にふうつと息を吹きかけられると、盲目になるといふことを書いておられます。

私が思うのに、権力者という者は盲目になるものです。皆さんも将来権力者になり得る人ですから、その時はどうか盲目にならないよう、このファウストを読んでよくお考え下さい。権力者というものは、非常に盲目になりがちです。そしてファウストも盲目になりました。それでも彼は埋立事業を促進させ、鋏の音が盛んにしている。これによつて、人類は此所に居つくものである。これも決して完全に安全な土地ではない。いつ海の潮がここを壊すかも知れないけれども、そうすればまた人々がかけつけて、そして自分の力でそれを修繕するのである。こういうふうにして自由というものは、日々われわれが獲得することによつて、自由というものを持つことができるのである。こういう人間生活をみると、われわれは自分がやがてそうである人間生活を考えると、嬉しいというような意味のことをいうわけです（詳しいことは省きます）。ここで彼の生命は絶えるわけです。しかし、ファウストの最後の独白、モノローグは実に立派な言葉であつて、私は読むたびに感激す

るのであります。くりかえしになります。ファウストが、結局、埋め立ててはいるが、安全ではない、潮に壊されて、安全ではない所、壊されると、また人々がかけつけて、協力してそれを修繕をして、そして自分の住家とする。こういうふうには、自由というものは、日々自分で獲得することによつて、自分のものとすることができるんだ。自分の土地にそういう人間が住むことを、自分は期待して喜びとするので、実に立派な言葉であります。

ところが、あに凶らんや、ゲーテがこのファウストを最後にどういふ境遇に置いたかといひますと、その埋め立てというものは完成しておらなかつたのです。その盲目のファウストが埋め立て事業が進んでゐると思つたのは、もうファウストの寿命も長いことはないだろう、自分がやがて神との賭けに勝つたらうとメフィストが思つて、自分の悪魔を呼びつけて、そして彼を葬る墓を掘らせておる。その墓を掘る鋏の音を、盲目のファウストは未来の人類の楽園と申しますか、大希望図を描いて聞いておつたのであります。実にゲーテという人は、自分の主人公を苛めたものであります。最後がこういう苛め方をしているのであります。ファウスト自身は、立派な事業をしてゐると思つてゐるが、それが実はそのようになっておらないんです。こういう状況は、先ほどいつたゲーテの最もマ

イナスの面であります。こういうことを経た上で、ゲーテが人間生活のうえで、ファウストの魂のうえで救われたという書き方をする。これがファウストの最後の所の読み方になるのでありますけれども、あまり時間もありませんので、詳しく申しあげることができませんから、一つお読みになっていただきたいと思えます。ファウストは、いわば男性的原理であつて、どこまでも活動しよう、行動しようと思ひからかっている人でもあります。そこへ彼がかつて愛したグレートヒエンという少女の霊が、すでに天国に居りまして、それがファウストの魂を迎えて、聖母マリヤに執り成すところがあります。そして最後は、永遠の女性がわれわれを導くというようなことを言っております。

「永遠の女性」とは、どういうことをいっておるのであるか、有名な言葉であるだけになかなかつかみ難い言葉であります。簡単にこれを、向上しようと思ふ心、理想の心、いろいろな暗黒面はあるけれども、どこまでも良き面をわれわれは願うのだ、われわれの理想だというふうに説く人もあります。それでよろしいでしょう。最後の所で、聖母マリヤはかつてファウストの愛人であつた少女グレートヒエンの魂に向かつて、「お前もつと高くお登り、お前が居ると思うと、その人・ファウストも追いついて来るから」と言っております。これは実に簡単で

すけれども、ゲーテが思いを込めて書いたのではないかと思ひます。いってみれば、女性原理でありまして、女性の原理は、結局相撲を取つて男性に勝つ筈がありませんから、原理が違つたのであります。行動する、活動する男性に対して、良き導きを与えるということ、これが良き意味の女性の心でしょう。ですから女性の心が高く向上すれば、男性も向上するわけです。こういうふうには男性的原理と女性的原理が高い意味で結ばば、或はプラスの筈が出るかも知れません。

そして最後の天上という、天の上で聖母マリヤが先ほどのようなことを言つておる。これは莊嚴な舞台ですけれども、これも先ほど言ひましたように、神というものを前提とすれば、素直に読めるんです。ただこれをすつかり人間的に観念して読もうとすれば、難しくなります。大体天上にマリヤが居るか居ないか、それにグレートヒエンの魂が居るか居ないか、そんなことはみんな分からないことなんですから。

ゲーテは、自然科学を研究したせいもありますけれども、結局、人間の働きというものは或る意志、或る方向というものを持つておれば、必ず生き続けるものであると思つたようであります。自分の自我の性というものはある。それがなければ自分はどうして活動して行けるかということとは別に形而上学的にいつたとい

うよりも、生活の実感であつて、いま或る目的をもつて、或る願ひをもつてやつてゐることは、必ず何かの形で生き残るのに違ひない。生きるに違ひないと思つておつたようであります。これはその人の力によりますから、大きいスケールも小さいスケールもあります。たつた一人の人にしかそれを伝えることができないという境遇の人もありますし、或いは二十人に伝えることができることもあります。昔の日本の名僧は、こう言つたそうです。道元ですか、「われわれはただ一人を教化する、一人を弟子とすればよいのだ」といふような意味のことを言つたと聞いたことがあります。優れた僧にして、自分の働きが残るのは一人だと思ひを決めたらしいと、まあ、いろいろな希望はありますけれども、何らかは残るといふ考えであります。これは一つの不死、死なないものである。その死なないものが後に残る。男性的な原理によつてより進められ、女性的な原理によつてより高い方向を与えられれば、人間の完成ということか或いはできるかも知れないということを、ゲーテは非常に言葉少なに、多くを語りません。多くを語りませんが、最後は、結局、願ひということになります。その人間の生きるという意味がよくあれかしと願つて、このファウスト全体を終わらせておられます。

全体を通じまして、現代における人間主義と

いうことは、先ほど申しましたように、ルネッサンス以後の強力な思想でありますけれども、それだけに人間に責任を負わされる辛いものであります。それをどう処理して行くかというのが、これからの問題であります。尤も考え方というものは、それに尽きるものではありません。いま強力に宗教的立場ということもいわれ、そして宗教的立場に立つて人間を超越している神の意志というものを信ずることができれば、人間はそれぞれ道を開くことができましよう。道は一つだけではありませんから。

ゲートは十八世紀の中頃から八十九つく生きた人でありますけれども、この問題はわれわれ自身のもので、決して過去のものではない。またわれわれがそれを読むのも、自分のものとして、自分の身に触れるという読み方が、正しい読み方ではないかと思えます。ファウストの最後のところに、「すべては比喻に他ならず」ということをゲートは言っております。永遠の女性は高きに導くということと一緒のところですが、すべては比喻に他ならずということは、こういうことでわれわれは現実の生活をみれば、すべて不満足な、つまらない、果敢ないものです。何時消えるか解らないものです。しかしここにも何らかの光は、元の光に何らかの形で映っているものです。だから本当の最高の真理があるとすれば、これは比喻である。比喻だ

から、つまらない、小さいものだけれども、しかしそこには高い意味が宿っている。高いものが比喻である。われわれの移ろいやすい人生は、比喻に他ならずといったのは、彼が高い処を指しておった人間であつたということがいえると思えます。しかし、それは聖者のごとく行つたのではなくて、人間のあらゆる要素を認めながら、かろうじて危うい道を辿りながら、この道を行つた人だということがいえると思えます。

大変不十分でしたが、この程度にいたします。

〔文責在記者〕

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。